

## イグサ実生苗利用栽培法 (第2報)

深浦壯一・淵上国弘・飯牟禮和彦  
(熊本県農業研究センター)

Souichi Fukaura, Kunihiko Fuchikami and Kazuhiko Iimure:  
Cultivation with seedling plant of Mat Rush (No.2)

いぐさ省力栽培法の開発をねらいとして、前報では実生苗利用手植え栽培法を試みた。その結果播種翌年の収穫時期に慣行の株分け苗利用栽培法と同等の生育量を示すことを報告した。

本報においては、水稻育苗箱および水稻移植機械のいぐさ実生苗移植への利用の適否を検討した。実験1では「植え付けの良否」を欠株の有無を指標に検討し、実験2では機械移植いぐさの「生育の良否」を収穫期の莖長と莖重を指標に検討した。

## 1. 材料および方法

実験1：水稻育苗箱および水稻移植機械利用植付試験  
試験区構成

一箱播種量：120, 240, 480mg

使用育苗箱：水稻稚苗用箱，水稻中苗用箱

播種期：2000年9月15日

移植機：2001年8月2日

使用機械：Y社製乗用5条ロータリー水稻移植機

試験規模：40m × 6 m

使用種子：2000年夏採取の遺伝資源「沖縄太い自殖」の自然自殖種子

育苗方法：水稻育苗箱に市販の水稻育苗用床土を充填し散播した。播種後は網室内のビニルプールに置床し、箱が水没しない程度の水位に地下水を常時掛け流した。適時市販液肥を施肥。

調査項目：欠株率（一区当たり一条の100株を調査）

実験2：水稻移植機械利用の栽培試験

播種期：2001年9月15日

移植期：2001年12月4日

収穫期：2002年6月25日

供試種子：2001年夏採種の遺伝資源「与那城在来」の自然自殖種子

調査項目：莖長と75cm以上莖重・サンプル数20株・反復なし

育苗方法は試験1に準じた。栽植密度は条間30cmの80株/坪の機械設定とした。耕種概要は基準に準じたが、追肥量は慣行比0.7とした。

## 2. 結果および考察

いずれの試験においても、出芽苗立ちは順調であり、試験1の播種翌年8月移植および試験2の播種同年12月移植も問題ない生育量が確保でき、機械に苗をセットするさいも十分なマット強度が得られた。

試験1：水稻移植に準じ代掻き移植を試みた結果、水稻同様に順調に移植が可能であった(写真1)。欠株はいずれの試験区にも観察されなかった。

植え付け爪の破損はなかった。なお、一株の掻き取り量を最大に調整した場合、爪とその取り付け金具の隙間に苗が詰まる不具合が生じたが、掻き取り量を減らすこ

とで回避できた。

中苗用苗箱は稚苗用に比べ、箱下での根の繁殖量が多く苗の取り出しがより困難であり、鎌による根の切り離しが必要であった(写真2)。これは箱底面の水抜き穴の多少が箱下への根の伸長の多少に影響したためと思われる。

試験2：移植は試験1同様順調であった。一株の生育量はほぼ慣行並みであったが、条間の空隙が大きく収穫期にも地表面が露出していた。収穫時草丈は $121 \pm 6.5\text{cm}$ 、 $c.v.5\%$ 、 $a$  当たり莖重は $80.5 \pm 42.5\text{kg}$ 、 $c.v.52.8\%$ であり作況収量 $114.0\text{kg}$ に比較して大きく下回った。これは移植機械の仕様に起因する条間30cmの粗植条件が影響したと思われる。

水稻移植機械利用によりいぐさ実生苗を移植栽培するには、一箱播種量は120mgで充分であり、苗箱からの取り出しの容易さを考慮すると稚苗用箱が適している。

本報の試験条件においては収量が慣行栽培に劣るため、機械移植栽培の技術実用化に向けては条間のより狭い移植機械の利用研究が今後必要である。

## 引用文献

1) 深浦壯一・飯牟禮和彦：九州農業研究 64, 22, 2002.

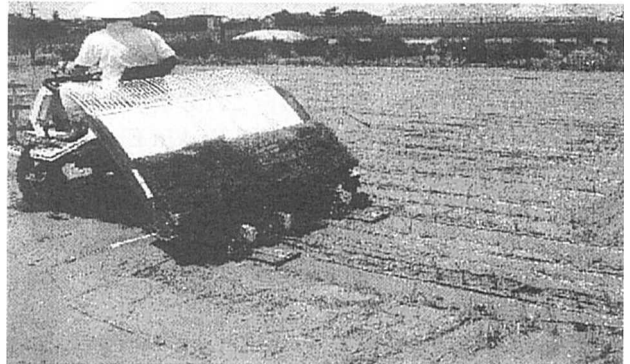


写真1 乗用水稻移植機によるいぐさ移植

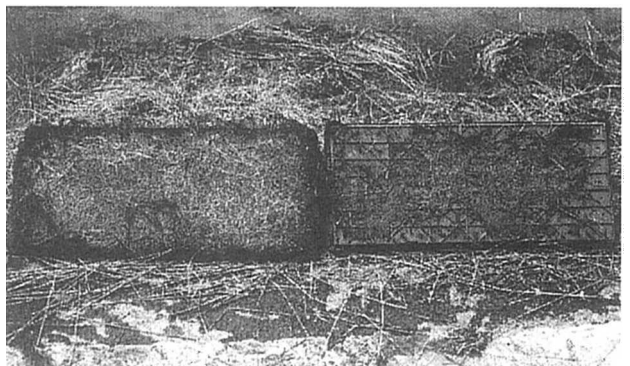


写真2 移植時の苗箱底  
(左中苗箱・右稚苗箱)